

つけたとき小林氏が喜んで、矢部吉禎氏の遺稿支那植物叢書（博物学叢書第2輯）を1941に編集されたとき写真入で脚註として書かれ、当時1斤6円であったことを記録されたことなど思い出し、早速いつて見たところ、すぐ見つかったので久しぶりで手にいれた。市価は100グラムで約400円で大正13年とはだいぶ高くなっているが、貨幣価値を考えれば当然である。それから店主に輸入先をきいたら広東だと答えたが、ずいぶん遠くから複雑な経路を経て私の手に入ったわけである。そこで私はこれを日本式料理として用いられないものかと、いろいろためして見たら酢のものはもちろん、なんにでも使えることがわかった。ことに加熱しても、とけないので、いろいろな煮物にまぜて用いると、どの場合にも合うようである。もちろんいろいろな意味で主食にはならない。なおこの藻については資源植物事典に書いてあるが、それからだいぶたつので一応書いておく。

### 新 著 紹 介

広瀬弘幸著：藻類学総説，内田老鶴圃発行，本文506頁，図版1，挿図229，学術語索引(和)16頁，同(英)12頁，和名索引33頁，学名索引26頁，定価1,500円。

著者の恩師山田幸男博士の序文にもあるように、広瀬博士は学生時代からよく本を読まれたが、よく本を読んだ人にして、初めて書き得た大著で、故岡村金太郎先生の名著、藻類系統学の現代版ともいう可き本でもあり、更に内容を検討していけば、SCHUSSNIGのProtophytenkundeやZIMMERMANNのPhylogenie der Pflanzenの袖珍本といった匂いのする本である。

第1部、第1章は藻類学の発達史で、18世紀以降、現代までの藻類に関する主な著書や業績を年代別に列挙して、かんたんに説明し、終りに現在活動している藻類学者の名とその専門内容を個別的に挙げている。特にわが国の藻類学の発達については、岡村金太郎に始まる東京大学理学部系、三宅駿一に始まる東京大学農学部系、宮部金吾、遠藤吉三郎に始まる北海道大学農学部水産系、田原正人に始まる東北大学理学部系および山田幸男に始まる北海道大学理学部系の各系に分けて細大洩らさず諸学者の名を挙げてその生立を説明し、わが国の藻類学の全貌を明らかにしている。

第2章は下等植物の分類学で、JUSSIEU, EICHLER から TIPPO, ENGLER までの分類大系を列挙し、著者の意見をも述べている。また分類大系4例をかかげた上で、著者自身の植物分類大系も示している。ここに著者年来の主張であるその系統樹の主幹を2本に分け、藍藻、紅藻、子囊菌、担子菌とつづく主幹と、黄色鞭毛藻からユーグレナ、緑藻、輪藻、蘚苔、羊歯、種子植物とつづく主幹とを考え、黄色鞭毛藻から分枝して褐藻類を頂

端とする1主枝を考え、その主枝の中に黄色鞭毛藻、珪藻、褐色鞭毛藻、渦鞭毛藻が入るとして、この意見が本文中の随所に見られる。

第2部は藻類の形態で、藻類の分類の規準 (Criteria) としての形質を述べている。

第1章は生殖で、生殖細胞の外形、繊毛 (鞭毛) の有無、それらの長さ、数、附着点、眼点、収縮胞について述べている。しかし SCHUSSNIG のように電子顕微鏡による解明がないのは残念であるが、わが国の事情では十分文献資料を集め得なかつたからであろう。

第2章の藻類の性では、受精物質 (Gamon) について MOEWUS と KUHN の化学的研究を述べ性決定物質 (Termon) におよんでいる。

第3章は生活史、核相交代、世代交代についての著者の年来の構想を公けにしている。すなわち、単相世代を G または g で示し、複相世代を S または s であらわし、両世代を比較する時に、外形の大なるものを大文字で、小なるものを小文字で示している。しかしツユノイト (*Derbesia*) の生活史は G. S. (GA $\times$ SA) 型と示し、その表現に苦心と細かい配慮の跡がうかがえる。また寄生の場合は  $\mathfrak{S}$  とか  $\mathfrak{G}$  とかの記号を用いている。

第4章は遊走子、孢子、接合子の初期発生の形態的特性を挙げ、分類の規準として重視すべき諸点を述べている。

第5章は栄養体の細胞構造を述べ、単細胞と多細胞、1核性と多核性、細胞分裂の3型、染色体、葉緑素などの色素体について述べている。

第3部は藻の種類で、分類学者としての著者はその細部にわたって述べたいところであろうが、紙数の都合で相当おさえている。すなわち綱という植物群単位で、その特徴を明快に述べ、各綱間の差異、更に各目間の差異も明らかにしている。

藍藻綱は GEITLER の分類によつており、紅藻綱では目の分類規準である造果器のでき方を述べ、更に発生形式の重要性を説いている。珪藻綱では、殻の構造と分類を結びつけ模式図でこれを示している。褐藻綱では遊走子囊の種類と遊走子形成をわかり易く述べ、緑藻綱では、体制の比較を略図で示し、世代交代も要領よく説明している。

術語索引は和→英、英→和と双方から引けるので、辞典的利用価値がある。

(猪野俊平—岡山大学理学部生物学教室)

テイラー 著

### 南北アメリカ東海岸熱帯及び亜熱帯の海藻

W. R. TAYLOR: Marine algae of the eastern tropical and subtropical coasts of the Americas (The University of Michigan Press, Ann Arbor, 1960, pp. I-IX, 1-870, 内 94 枚の図版又は写真版を含む)

著者はその壮年の砌即ち 1924 年から 1926 年に至る年間、毎年夏期 Carnegie Institution of Washington の Dry Tortugas の臨海実験所に滞在して附近に産する多数